

千観撰『法華三宗相對抄』の資料的価値

道 元 徹 心

はじめに

叡山文庫所蔵の千観撰『法華三宗相對抄』は、一九四〇年に佐藤哲英博士によって概要報告がされて以降、その具体的内容については研究されてこなかった。千観（九一八—九八三）の事績や浄土教の面に關しては、佐藤哲英博士⁽¹⁾などの先行研究がある。

千観とほぼ同時代の人物に応和の宗論（九六三）で有名な良源（九二—九八五）がいる。千観は良源ほどには後世に名を馳せることはなかったが、論義に關連する貴重な大著を残している。それが従来ほとんど知られなかった千観撰『法華三宗相對抄』である。本稿では本書の具体的内容を研究し、その資料的価値を提示する。また本書が日本天台の一三権実論争において、思想史的に如何なる位置にあるかを考察したい。

一 『法華三宗相對抄』について

千観の論義に關するものとして『十六義科目録』⁽²⁾がある。今回紹介する『法華三宗相對抄』（以下『三宗相對抄』）五〇巻は大部のもので、天台・法相・三論の三宗の立場から經典論疏の引用をし、『法華經』二八品の解説を展開した文献で広義としての論義書である。

この『三宗相對抄』は佐藤博士が指摘する⁽³⁾ように未再治本で、同じく千観の著述『法華三宗要録』（以下『三宗要録』）が再治本となっている。両書ともに数巻の卷末にみられる奥付から千観没後百年余り経過した平安末の古写本とみられる。書き始められたのが応和の宗論の前年（九六二）で、⁽⁴⁾『三宗相對抄』は勿論のこと『三宗要録』でも外題が『法華三宗相對抄』となっている。ただ『三宗要録』の外題には「別本」と明記されている。本稿では便宜上両書を同一書と扱っている。

『三宗相對抄』はほとんどが三宗の典籍からの引用で構成

されるのに対して、『三宗要録』は若干千観の自説が盛り込まれている。『三宗相对抄』と『三宗要録』の両書を合わせると、実に三三〇七丁にもなる膨大な写本となっている。引用される文献は、主に天台三大部や湛然の『法華文句記』、三論では吉蔵の『法華義疏』『法華遊意』、法相では基の『法華玄賛』とその註釈である鏡水寺栖復の『法華経玄賛要集』(以下『玄賛要集』)である。

この栖復の『玄賛要集』については、その書の成立時期を考えると日本天台で千観が最初に用いたものと考えられる。特に『玄賛要集』三五巻は卷二二・卷二三・卷三〇・卷三二の四巻が欠本となっていることが知られている。しかし、欠本となっている該当四巻分の内、三巻分の相当量が『三宗相对抄』に引用されており、そうした意味においても本書は貴重文献といえよう。これは改稿し逸文復刻として紹介したい。⁽⁶⁾

書誌的には、縦二四・五糎・横一五・〇糎・一丁左右に各七行、一行に一九字前後。胡蝶綴で『三宗相对抄』一六冊と『三宗要録』四冊が全三〇冊として一具の装丁となっている。また、四冊の『三宗要録』は外題に「別本」の表記がある。『三宗相对抄』五〇巻の内、本巻は卷一一・一五・一六・一八―二〇・二二―二五・二八―三三・三七・四一・四二・四九の各巻が欠本となっている。

別本第三の奥書には「保安二年正月二十六日申時書了」、本巻第五卷奥書は「治承四年十月二十二日 於大原来迎院書了」、巻によつて書写した年代は異なり、平安時代末の一・二一年頃から一・一八〇年頃に大原来迎院などで写されたことが分かる。また本巻の第十二巻には、築島裕博士による一九五八年の調査カードが挿入されており、それによると前半が院政期で後半が鎌倉期の写本と記されている。⁽⁷⁾

二 『法華三宗相对抄』における千観の学術態度

『三宗相对抄』別本第一巻は、『法華経』序品での三宗の通釈を始めるに先立ち、經典成立史の検証を展開している。ここでは千観の興味深い説示がみられる。

／七品以天授品與寶塔同品四本違三寔為未可文。／又誰言提婆品羅什公不譯。但是江東所傳之本無／有此品故時人見之云什譯無此品實非什公不譯／故天台釋云羅什譯妙經畢令僧叡講之叡開内／九轍當時二十八品長安客人請此品淹留在内。江東所／傳止得二十七品至下釋具可明之又於屬累品古今諸師皆云／什公深得經意。但唐朝慈恩獨不許此義。遂／付八相違十不可因茲妙樂大師一々反破之。

(別本第一巻・一四丁右一左)(句読点傍線は筆者加筆、以下同)

このように提婆品は江東地方(現在の浙江省)由来の伝承本で、(元々法華経には収められず)羅什訳の『法華経』には当初提婆品がない状態であった。羅什訳の妙法蓮華経はついに僧

觀に命じてこれを講じさせ、僧觀はこれを開いて九轍としたとされる。提婆品の一見の為に長安に暫く滞在する人々がいた様子である。

また囑累品に関する記述が、先の『三宗相對抄』序分の提婆品記述に続いて見られる。それは傍線部分の千観自身の文である。詳しくは別稿とするが、いわゆる囑累品の經中・經末說の問題で、『法華經』の成立に関して囑累品が經中にあるか經末にあるのか、どちらが本来的に正しいかの問題を提示している。

以上、注目される点は近年学者間で研究が進んでいる「法華經成立史の問題」⁽⁹⁾、特に提婆品の成立の問題と囑累品の經典における經中經末の位置問題に関して千観が考察していることである。智顗の提婆品長安客人淹留説をふまえ提婆品の問題と囑累品の問題を千観が紹介するに留めている。今日諸説ある内の特定説を千観が主張するわけではなく、あくまで紹介するに留める意図は、天台法相三論の三宗各々の立場で『法華經』解釈を論じようとした千観の撰述態度と理解されるのではなかろうか。

三 『法華三宗相對抄』にみられる特異表現

火宅三車の譬喩における三車四車の問題で、露地の白牛車と門外の牛車の同異の問題である。両者を同一とするのが徳

一の法相の立場（三車家）であり、最澄は羊鹿牛の三車の他に白牛車（大白牛車）を加えて四車と説く。門外の牛車と露地の大白牛車が異なる解釈で、三乗の菩薩と一仏乗としての大乘菩薩とが異なる意で、それを千観は次のように説く。

又未^ニ出宅ヲ許以牛車ヲ。既亦破シテ大ノ後ニ出宅ヲ与ハ。是何等ノ車ヲ。若言与テ白牛ヲ棄本ノ黄牛ヲ故。ノ既尔即應捨テ頓学漸ヲ。黄ト白ト牛ノ相因行何殊。
（別本卷五・四二丁左）

三車に示す牛を黄牛と喩え、白牛を与えて黄牛を棄てることを説いている。黄と白の牛の相因行が異なるのである。つまり三乗方便としての牛と一乗真実としての白牛を明確に区別し、天台の四車家の立場を鮮明にしている。⁽¹⁰⁾このような三乗の菩薩道を黄牛に譬える例は日本天台史ではほとんど見られない特例である。⁽¹¹⁾

次に三宗を比較する上での譬喩である。別本卷五の一七丁右から一八丁右にかけての方便品を解釈する箇所において、法華一乘法を優曇樹に喩えている。優曇の譬喩は三宗で如何と自問し、天台と三論は俱に皆（優曇）花をもつて『法華經』を喩える。輪王が三千年に一度現れ三乗の機根を熟させて一乘法に教化する。天台と三論において、この法を聞く者は皆俱に成仏する。但し（法華）玄賛の意は分明ならずと述べる。つまり法相の義は一乘法を明確にせずと説く。千観は譬喩を

使い一乘真実三乘方便の義を展開させているのである。⁽¹²⁾

賛云金輪王出大海少減金輪路現其花ノ乃生記文引此解嘉祥（引河西解釈之）此法花經法輪ノ王出生死ノ漸減一乘道顯方演説之。^{又問。}天台三論俱皆以ノ花喻法花經以輪王喻聞者當ノ成仏。但玄賛ノ文不分明。若是能説ノ仏譬輪王所説（別本卷五・二七丁左一八丁右）

四 『法華玄賛要集』の引用

次に『三宗相對抄』から『一乗要決』への影響について考察しよう。先ず『三宗相對抄』には『法華經』二八品の序品から順次、天台三論法相の順序で『法華文句』『法華義疏』『法華玄賛』等が引用される。『法華玄賛』が引用される場合、その殆どで『法華玄賛』の引用に続いて『法華玄賛要集』（以下『玄賛要集』）が引用される。この『玄賛要集』の使用については、日本でいつ頃から始まったか関心が置かれていた。国文学の方面でその研究があり、日本での引用の嚆矢を興福寺仲算の『法華經釈文』の撰述に係る九七六年とみる説がある。⁽¹⁴⁾しかし、その一四年前に千観が『三宗相對抄』に引用しており、千観が日本で最も早く『玄賛要集』を用いたことになる。しかも『三宗相對抄』本巻第一巻の冒頭内題に「法華經玄賛要集第一 鏡水沙門栖復集 沙門千観抄要文 記之菩提贊本文」とある。本来内題として「法華三宗相對抄」とあるべきを如何に千観が『玄賛要集』に強い関心を抱いていたかと思われる。

当時日本に伝来した『法華玄賛』を理解する上での最新資料であったと推測されよう。

ところで源信（九四二—一〇一七）の『一乗要決』には『玄賛要集』が二個所にわたり引用される。その二個所ともが千観の『三宗相對抄』に引用される『玄賛要集』の引用文に一致する。千観の『三宗相對抄』に引用される『玄賛要集』の文章量は、『玄賛要集』全体の五分の程度と推定される。よって、千観は『玄賛要集』からその要文を引用したと考察されよう。千観と源信の『玄賛要集』への着目が偶然一致したとみるより、むしろ千観から源信への影響と考えることが妥当ではなからうか。千観の引用例を源信が指南として原典を参照し『一乗要決』に引用したと論考される。『一乗要決』巻中の引用と『玄賛要集』とを比較すると源信は抄出し引用していることが分かる。

『一乗要決』巻中

（大文第五・斥定性二乗水滅計）

要集（法相宗鏡水抄）云。二乗ノ果ハ應レ有二定性。除二不定性ノ大乘。三乗之中。隨一姓故。如二定性大乘。又問。在二於滅定ニ許レハ有七

『法華玄賛要集』第三卷

故大論及法華論。四種聲聞。不為趣寂授記。若定性人。同増上慢。言根未熟後可熟者。違諸教失。所言違理者。立量云。二乗之果是有法。應有定性。除不定性大乘故。宗因云。三乗之中隨一攝故。猶如定性大乘。定性大乘隨一攝。定性大乘得成佛。二乘定性。三乘隨一攝故。同彼定性大乘得成佛。又問彼日。在於滅定。許有七八否。更問無餘依涅槃

八一否。又問。無餘
涅槃許有七八一否。
若不許者。量云。汝
減定^二應名^二無餘依涅槃^一。
同^二彼^二無餘^一。無^三
七八^二故。如^二彼^二無餘^一。
及量云。無餘涅槃^二
應名^二減定^一。許^カ有^二
七八^二故。如^二減定^一。又
量云。趣寂^二聲聞^一。
定^二不^二成佛^一。以^レ無^二大
乘^一因^一故。由^二如^二虛
空^一。（惠全二、一〇四—
一〇五）

槃。許有七八否。若不許者。量云。汝減定是
有法。應名無餘涅槃故。宗。因云。同無餘。
無七八故。如彼無餘涅槃。無餘涅槃七八無。
無餘涅槃。不再起減定。七八無同彼。無餘無
再起。反量云。無餘涅槃是有法。應名減定
故。宗因云。許有七八故。同喻如減定。減定
七八在。減定許再起。無餘涅槃七八在。應同
減定得再起。又量云。寂寂聲聞是有法定。不
成佛故。宗因云。以無大乘因故。猶如虛空。
（傍線は『一乗要決』対応部分で筆者付加、以下同
（新纂統藏三四、二二九上）

『三宗相對抄』所引の『玄贊要集』
故大論及法花論說四種聲聞不為趣寂授記○言
違言違理者立量云二乘之果○應有定性除不
定性大乘三乘之中隨一攝故如定性大乘○又問
○在於減定許有七八否更問無餘依涅槃許有
七八否若不許者量云汝減定○應名無餘依涅槃
同彼無餘無七八故如彼無餘涅槃○反量云無餘
涅槃○應名減定○許有七八故○如減定○又量
云趣寂聲聞○定不成佛以無大乘因故猶如虛空
○

○は千観による省略部分
（『三宗相對抄』第一・七五丁左一七六丁右）

次に『一乗要決』卷下に引用される文を調べると、現在流
布している正統藏經『玄贊要集』には該当文が見あたらず、
千観の『三宗相對抄』の引用文と正に一致することが判明し
た。これは正統藏經の底本となった法隆寺写本に本来有るべ
き文章が欠落していることを意味する。法隆寺本は『三宗相對
抄』より約三百年後の弘長元年（二六二）に書写されてお
り、少なくとも源信の『一乗要決』撰述時の寛弘三年
（一〇〇六）には完本であつたものが流伝の過程で一部が欠落
したものと推定される。このような点から法隆寺写本を底本
とする『玄贊要集』流布本は大きな問題を抱えており、『三
宗相對抄』所引の『玄贊要集』の方が現行の流布本よりも文
献的に優れていると判断されよう。『一乗要決』卷下引用の
『玄贊要集』と『三宗相對抄』所引の『玄贊要集』を比較す
ると次のように一致する。

『一乗要決』卷下（大文第八・弁教）『三宗相對抄』所引の『玄贊要集』
樞要
集四云——中略——

諸教次第淺深如是。何苦是前權。
非最後實語。其三。然基公ノ文。
應レ有^二別意^一。如^二法華玄贊要集
第四云。就^二法華經ノ意^一。並^二顯^二一
乘^一。而先師ノ疏ノ文^二。多引^二二五
性^一。欲^二歸^二二一致^一。故亦兩
不定也。就^二法花經意並顯^一一乘而

存ナリ。勿下因^二此言^一、遂^二生^中ト偏執^上。故百法記^二云^一。不^レ應^三定說^二有^ト之與^レト^一無^一。推^二決^上於佛^一。斯爲善會。此即疏主之深意也。鏡水沙門棲復撰。則知。慈恩一乘爲勝。然所宗故。忽不撥五性。順道理故。永不背一乘。由此唱言不可定說。(惠全^二、二〇九^一)

先師疏文多引五性欲歸一致且亦兩存勿因此言遂生偏執故百法記云不應定說有之與無推決於佛斯爲善會此即疏主之深意也言依善戒經等者二種之性 善戒地持雙明有性無性
(『三宗相對抄』第二・八丁右)

源信は千観の『三宗相對抄』を指南としながら、『玄贊要集』の原本から引用したといえるのではなからうか。また、『一乘要決』において、源信の経論からの引用態度と宗観念について『一乘要決』序文には、「諸乗ノ權實、古來諍也。俱ニ據^二經論^一。互^ニ執^ス是非^一。——中略——全^ク捨^二自宗他宗之偏黨^一。專^ラ探^ルニ權智實智之深奥^一。」とあり、源信は、自宗他宗の偏黨を捨て一三權実論争を論じる。千観は三宗を相對的に捉える。優曇華の譬喩で天台三論に対して玄贊の文は分明ならずと表現する。ここに源信と千観における両者撰述態度の近似性が認められるのではなからうか。

おわりに

千観撰『法華三宗相對抄』の内容を研究した結果、次の点
が明らかになった。

千観は同書を撰述するにあたり、冒頭において『法華經』

千観撰『法華三宗相對抄』の資料的価値(道 元)

の文献成立を吟味し、天台大師以降の諸師の見解を伝聞も含め検討している。日本天台の教学を伝承する千観が用いた独自表現がみられた。そして、『三宗相對抄』の膨大な引用文の一部を調査すると、栖霞撰『法華玄贊要集』の引用が目され、『玄贊要集』逸文の復元が可能であることが判明、同時に大日本統藏經の底本よりも『三宗相對抄』引用の『玄贊要集』の方が文献として優れていることが明らかとなった。以上のことから『法華三宗相對抄』は文献として貴重な価値を有するものと結論付けられよう。

今回、『三宗相對抄』と『一乘要決』の引用文の一致点を考察し、千観から源信への影響が少なからず有したことも明らかとなった。一三權実論争の終局面については、良源から源信へと捉えることが通常であったが、一乘思想の系譜は良源よりむしろ千観から源信へと把握することが重要であると考察した。今後さらなる研究へとつなげたい。

- 1 佐藤「二九七九」、梯「二〇〇五」、末木「一九九二」。
- 2 天台宗全書、第二三卷、二十五頁。
- 3 佐藤「二九四〇」。
- 4 佐藤「二九七九」六九頁。
- 5 『仏書解説大辞典』(小野玄妙編、大東出版社)第一〇卷、三二頁。
- 6 ただし、『玄贊要集』の欠本卷二二が引用されているであらう。

千観撰『法華三宗相對抄』の資料的価値（道元）

う『三宗相對抄』の該当は欠本部分であるため逸文復元ができないが、『法華玄贊要集』の欠本個所の卷二二か二三の一卷が京都禅林寺に所蔵されているとの御教示を落合俊典教授より本稿発表時に頂いた。筆者未見であるが、書写年代がもし欠落文を有する法隆寺写本と近い場合は細心の注意が必要であらう。

7 築島博士のメモには「本書前半と後半と異筆にして前半は院政／期、後半は鎌倉期の書写なるべし、朱の調点／も前半後半別筆なれどもヨコト点は同じく／ニシハカ点なり、前半は院政期、後半は鎌倉／期の 調点なり／昭和三十三年七月十九日／築島裕識」とある。

8 道元徹心「叡山文庫蔵・千観撰『法華三宗要録』序の記述について」〔天台学报〕特別号、二〇一八刊行予定。

9 伊藤瑞嗣「法華経成立論史——法華経成立の基礎的研究——」平楽寺書店、二〇〇七。

10 道元徹心「叡山文庫蔵・千観撰『法華三宗相對抄』について」（坂本廣博博士喜寿記念論文集『佛教の心と文化』二〇一九刊行予定）。

11 中国の密教部の典籍で少しみられる表現である。しかし、日本においては三車四車の用法として、安然が『教時評論』（大正蔵、七五、三六八中）で三論を四車家として「如是等義。與三論同。羊車鹿車黄牛 車大白牛車。合為四車。」と示す程度である。

12 注10に同じ。

13 山崎誠「成唯識論『鏡水抄』佚文考」（『日本古典文学会々報』第九九号、一九八三、六一—七頁）。牧野和夫「中世における仏典注疏類受容の一形態——『鏡水抄』のこと——」（『汲古』第

六号、一九八四）。

14 高橋宏幸「『法華経釈文』撰述に関する一資料を巡って」（『国文学論考』第三六号、二〇〇〇、一四—一六頁）。

15 『新纂統蔵』第三四卷九二九中によると、底本は奥付に「此書三十五帖。年來之間。勸微力。料紙調儲。勸進筆師。書寫畢。願自他依此功德。生生世世值遇太子聖皇。在在所結緣法華經。仍法隆寺大經藏安置。寺門不出。不可被所出他所而已。弘長元年辛酉七月二十三日」とある。

〈参考文献〉

- 佐藤哲英「千観内供の研究」『宗学院論輯』第三十輯、一九四〇
佐藤哲英「叡山浄土教の研究」百華苑、一九七九
梯信曉「千観の浄土教思想」『大乘佛教思想の研究 村中祐生先生古稀記念論文集』山喜房仏書林、二〇〇五
末木文美士「千観の『即身成仏義私記』について」『天台思想と東アジア文化の研究』塩入良道先生追悼論集、山喜房仏書林、一九九一
道元徹心「叡山文庫蔵・千観撰『法華三宗要録』序の記述について」〔天台学报〕特別号、二〇一八（刊行予定）
道元徹心「叡山文庫蔵・千観撰『法華三宗相對抄』について」『佛教の心と文化』坂本廣博博士喜寿記念論文集、二〇一九（刊行予定）

（本稿は、平成三〇年度科学研究費補助金（基盤研究C18K00070）「上古日本天台における一乗思想の基礎研究——叡山文庫蔵『法

華三宗相對抄』を中心に——」の成果の一部である。）

〈キーワード〉 千観、源信、『法華三宗相對抄』、『法華玄賛要集』、

一乗

（龍谷大学教授）

新刊紹介

菅野博史 訳註

法華玄義Ⅲ・観音玄義・法華経安楽行義
新国訳大蔵経 中国撰述部 1-5

（法華・天台部）

A五版・三五〇頁・本体価格一〇、〇〇〇円

大蔵出版・二〇一八年九月